日本味と匂学会誌　Vol.33　No.2　PP.111-112　2026 年 11 月

巻頭言

「日本味と匂学会誌」創刊号に寄せられた期待、私が答えられなかった期待、私からの期待と提案

横須賀　誠

（日本獣医生命科学大学）

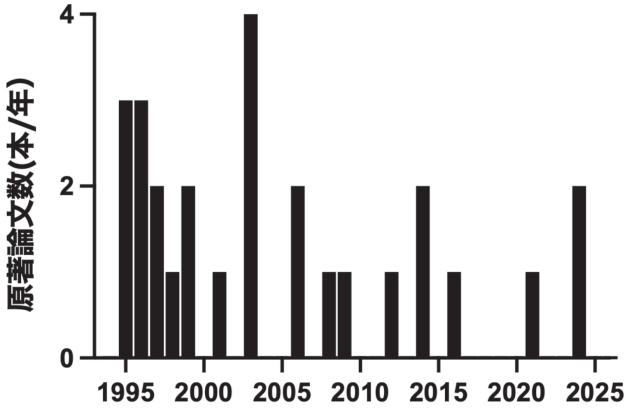
2025 年度の年会（大阪大会）において、日本味と匂学会功労賞という栄誉を賜った。受賞後、編集委員長の重村先生より巻頭言の執筆依頼を頂き、功労賞の副賞の一つと受け止め、謹んでお引き受けした。

苦し紛れに、前号（33 巻 1 号）の廣田順二先生が書かれた巻頭言の冒頭フレーズをそのまま拝借して書き始めてみたものの、これ以降の文章がまったく出てこなかった。その後、長い時間思い悩んでいたが、ある時ふと、巻頭言を書くのはこれが最後の機会であり、それならば功労賞の最大の理由である“日本味と匂学会誌編集委員歴”を振り返り、やり残した課題を見つめ直すべきだと思い至った。

そこで、編集委員会に 12 年間（編集委員長退任後のアドバイザーとしての期間を含む）携わらせていただいた現在の私が思う、これからの日本味と匂学会誌（以下、本誌）への期待と提案を述べさせていただくことにした。

「本学会では Chemical Senses を欧文誌と位置づけており、本誌には邦文論文のみが掲載可能となっている。大変喜ばしいことに本学会員の研究レベルはとても高く、年次大会では国際的にも評価される研究が多く発表されているが、そのことが逆に邦文の原著論文の投稿数を少なくする一因になっているとも考えられる。今後、邦文論文の学術的価値を担保しながら本誌への投稿を促していく必要がある」

これは、私が本誌編集委員長時代に書いた巻頭言（29 巻 2 号）の一部である。しかし、委員長在任中に私は自らに課したこの課題を進めることができなかった。客観的データに基づいて反省するために、創刊号以来の本誌における原著論文の掲載数をグラフ化してみた（図）。本誌は原著論文中心の学会誌というよりも、会員への情報提供の場としての性格が強い。そのため、他の学会誌のように必ずしも原著論文の掲載数が評価の指標にはならないことは承知している。それでも、グラフが示すように、創刊（1994 年 6 月）から最初の 5 年間は原著論文が毎年コンスタントに掲載されていた。しかし、2010 年以降は原著論文が掲載されない年が目立って増え、私が編集委員長に就いた 2021 年以降（前号まで）は、わずか 3 本にとどまっている。このデータを見て、私は改めて本誌が持続的に発展していくためには、コンスタントな原著論文の掲載も必要であると感じた。



「日本味と匂学会誌」に原著論文として掲載された論文数の推移。創刊年（1994 年）から 2026 年まで。論文数は年間の合計数（2026 年の調査対象は 1 号のみ）。

原著論文の掲載数調査に合わせて、創刊号の冒頭に掲載された発刊記念の寄稿文（4記事）を読み返してみた。その一つ、名誉会員（当時）・河村洋二郎先生による「学会誌の発刊を記念して」と題された寄稿文には、「味と匂の問題を自然科学と人文科学の両面から学際的に取り上げることこそが本学会の本質であり、それゆえに学会誌の意義と使命は極めて重大である」と述べられていた。実は、今から2年前（31巻2号）、重村編集委員長のもと、本誌としては初の試みとして「人文・社会科学系の味嗅覚研究の現在」という特集が組まれた。哲学、芸術、歴史、芸道（文化史）という、理系の研究者が多数を占める本学会では馴染みの薄い4つのジャンルからの総説特集であった。この特集の冒頭、特集の趣旨に関する記事を担当された鈴木隆先生は、その結びの部分で、人文・社会学系の研究者の本学会への積極的な参画に期待を寄せられていた。創刊号で河村先生が本誌に寄せられた意義と使命の実現は、30年以上の歳月を経てやっとそのスタートに立ったということであろうか。

編集委員長を退任した今、あらためて思うのは、（本学会の会員以外も含めた）人文・社会学系の研究者にとって日本語でしか説明できない研究論文の投稿先として本誌が選ばれる存在になることが、本誌の将来に重要なのではないかということである。そうなることで、河村先生が本誌創刊号に寄せられた期待に答えられるのではないだろうか。

もう一つ、創刊号の発刊記念の寄稿文に言及する。当時の会長、栗原堅三先生による「『日本味と匂学会誌』の発刊に寄せて」の中に、前編集委員長として私が強い不安を覚える言葉を見つけた。それは、以下の通りである。

「学会誌を発行しても、学会員にとって真の意味での有益な会誌になりうるのか（中略）。他の学会の会誌には、発行は続けているものの会員にはほとんど読まれていないものもある。「日本味と匂学会誌」は、この二の舞にはしたくない。これには、まず総説や解説記事を増やすことが不可欠と思う」

私が編集委員長・副委員長の時代には果たせなかった、「総説や解説記事の数を増やすこと」については、重村編集委員長を中心とする現在の編集委員会のご尽力によって飛躍的に増やすことができた。現編集委員会委員の皆さんには心からお礼を申し上げたい。私が不安を覚えたのは、「会員にはほとんど読まれていないものもある」の部分である。実はいま、学会誌の電子書籍化によって会員の本誌閲覧率が低下しているのではないかとのご指摘を耳にする機会が増えている。私が決断した本誌の電子化が、栗原先生が警鐘された「ほとんど読まれない」の方向に向かわせてしまっているのではないかとの不安である。会員の手元に冊子体の本誌が“直接”届いていた時代は、本誌に“触れる”機会は保証されていたため、目次に興味を惹く記事を見つけてもらえれば中身を読んでもらうことができた。しかし、電子化に伴い、会員自らの意思で学会ホームページにアクセスしない限り本誌に触れることができなくなったことで、閲覧率が減少に傾いているのではないか。これが事実だとすると、総説・記事の数を増やした現在の編集委員会の努力を、“電子化”が無駄にしている可能性がある。これは、何とも心苦しい現状である。

今回、巻頭言を寄稿させていただくことに際し、本誌創刊の理念、人文・社会学系の研究者の参画に対する創刊当時の期待、原著論文の掲載数の推移、これらを並べて見られたことは大変に意義深かったと思う。その一方で、編集委員長として自分がその期待に応えられていたのか、私は功労賞に相応しかったのか、深く考えさせられてしまった。しかし、反省でこの巻頭言を終わらせてはいけない。本誌に関わる過去および現状に鑑みて、私から今後の本誌編集委員会（ならびに学会会員）への期待と提案をお伝えしなければこの巻頭言は意味を持たない。

本誌が原著論文の投稿先として選ばれ、その掲載数を増やすためには、何をさておいても本誌を読んでもらい、味と匂の研究にとって有益な学会誌であることを認識してもらわなければならない。そのために、編集委員会には、会員の本誌閲覧率を増やすことにご尽力いただきたい。さらに欲を言えば、学会会員以外にも「日本味と匂学会誌」を手に取っていただける方策もご検討いただきたい。その一つとして私からの提案は、冒頭で述べた「邦文論文のみ」という編集規定の見直しである。年次大会初日にはアジア国際シンポジウムが組まれており、韓国や中国など近隣アジア諸国における嗅覚・味覚研究の活発化が実感できる。英文論文・記事の掲載を可能にすることで、彼らとの国際交流を進める「場」として、本誌を活用できるのではないだろうか。ひいては、これが読者数の拡大にもつながるのではないかと思う。

最後に、巻頭言に謝辞を記すことはおかしいと十分に承知の上で、元学会員の市川眞澄先生と村本和世先生に心から御礼を申し上げます。お二人の存在がなければ、私が功労賞を頂くこともこの巻頭言を書くこともあり得ませんでした。本当に有難うございました。